

広島カープの優勝に思う

篠崎 辰夫

広島東洋カープが、早々にセ・リーグの優勝を決めた。25年ぶり、それもブッチぎりの優勝である。優勝を決めた試合をたまたまテレビで見ている、広島ファンならずとも拍手喝采、感動した。

胴上げを本拠地東京ドームで目の前で見せ付けられる格好となった巨人は、歓喜の輪を背に、監督以下そそくさとベンチ裏に引き上げていき、ベンチは無人となった。このシーンはテレビの中継でも映し出され、正直いい気持ちはしなかった。相手の胴上げをしっかりと目に焼き付け、この悔しさを次に繋げろ！と、選手達を鼓舞するのが指揮官の務めではないのか……。巨人の弱さ、覇気の無さに「喝！」を入れたい。

この優勝にもっとも貢献したのは、米大リーグから復帰した黒田投手と言われている。一昨年複数の大リーグ球団からオファーされた年俸約18億5000万円を断り、4億円で古巣・広島東洋カープと契約。前年度の所得を基準に支払わなければならない2015年度所得税（約9億円）のことを考えれば、去年は「カネを払ってプレーする」状況で、年俸が6億円に上がった今年ようやく収支が「黒字」転換したという。

プロの世界ではカネを追いかけて所属チームを渡り歩くのが当然だが、「それよりも大切なものがある」という生き方は、多くの日本人の心を揺さぶった。この男気がセンセーショナルに報じられ、広島ナインやファンが即座に反応し燃えた。今、広島は赤に染まっている。

広島東洋カープは、日本プロ野球では唯一の市民球団。地元企業マツダから最小限の支援を受けて球団を運営しているらしいが、お金がないので補強もままならず、これまでFAで選手を獲得したことがないという。今季は前田健太がメジャーへ行ってしまい、野球解説者もほとんどが優勝は予想していなかった。お金や知名度で物事が動く今の世の中。カープの躍進は、お金や知名度などの論理で説明できない「何か」が、カープに宿っている。注目されなかった選手、調子を落として捨てられた選手、5倍の年俸を断って戻ってくる選手、その選手に感化された選手らが、ファンと一体となって、潜在能力を最大限に発揮し、お金持ち球団を倒している。プロ野球もまだまだおもしろい、と思い直した次第。

これこそ、東京一極集中の日本で、地方が、それぞれの魅力を引き出すために必要な力ではないだろうか。安倍内閣の掲げる「地方創生」「一億総活躍社会」実現のいいお手本として、大いに参考にして欲しいと思う。そして、被爆地広島で起きているこのミラクルを、映画やドキュメンタリーにして、ぜひ発信してほしい。

編集手帳

一、グラウンドに降りない。一、物を投げ入れない。野球場によくある注意書きである。いまはもうない先代の広島市民球場で風変わりな禁止事項を見たことがある。八一、スタンドで焚火をしない▽◆昔は気の荒い観客がいたらしい。球場ができた昭和30年代初めには、原爆の地獄絵が焼き付いた目で平和の化身である競技に見入った人もいただろう。「焚火」の一語に、単なる娯楽とは違う凄みを感じた覚えがある◆時は移り、火はいま地元ファンの胸のなかで燃えているようである。

広島カープが25年ぶりのリーグ優勝を目前にしている◆ベテランが目の色を変え、若手が躍動し、昨季までのエース前田健太投手（現・米ドジャース）が抜けた穴を探そうにも探せない。「強いね、まったく」「弱ったね、どうも」。舌打ちしながら他チームに肩入れしてきた人たちも、今季の戦いぶりには特大の舌打ちをもう一つ響かせた上で最敬礼を惜しむまい◆現代川柳にある。△勝てカープ野球を知らぬわしじゃけど▽（大前タミエ）。球団名をどう置き換えても、焚火が匂う一句の味は出まい。幸せな選手たちである。